

台風21号の通過後に確認されたセタシジミ漁場の地形変化

井戸本純一

1. 目的

2018年9月4日の台風21号通過後、琵琶湖の西部や北部のシジミ漁場では、大量の礫や貝殻が網に混入し、操業が困難な状況に陥った。これらの混入物がどこからきたものかを探るため、湖底の形状変化を調べた。

2. 方法

1:10000 湖沼図（昭和30年代測量）を参考に高島（西部）および今西（北部）の漁場と周辺水域にそれぞれ6本の測線（図1）を設定し、2018年11月12日（今西）および21日（高島）にGPS魚探を用いて1秒間隔で水深を連続測定した。地図ソフト（カシミール3D）を利用して実際の測線（調査船の軌跡）を湖沼図上に表示し、等深線との交点に直近の測深値を抽出して水深を比較した。

3. 結果

湖沼図に記載された情報から、これらの水域におけるシジミ漁場は、礫を多く含む地質からなる湖底段丘の前縁部分に形成されていたことがわかった。測深結果は、湖岸に近い浅い部分では湖沼図とほぼ一致したが、水深約10mから30m以深にいたる段丘前縁部分が多く測線で後退していた（図2）。

これらのことから、今回の台風による礫や貝殻の増加は、湖底段丘前縁に堆積していた薄い砂の層が内部波や一時的な湖流によって

流失あるいは攪拌されることにより、下層の礫や埋没していた古い貝殻などが表面化した可能性が高いと考えられた。

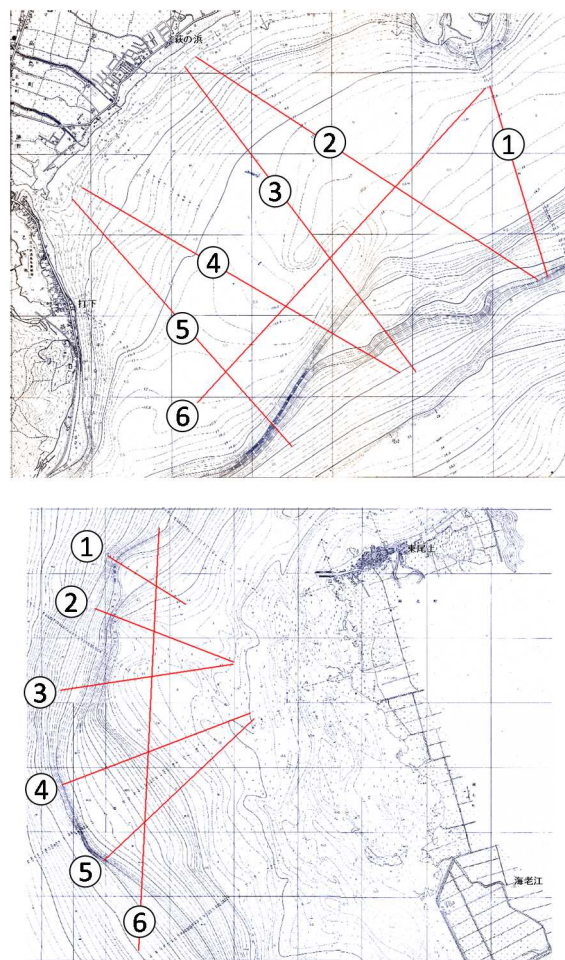


図1 高島(上)および今西(下)の各漁場周辺に設定した調査測線。

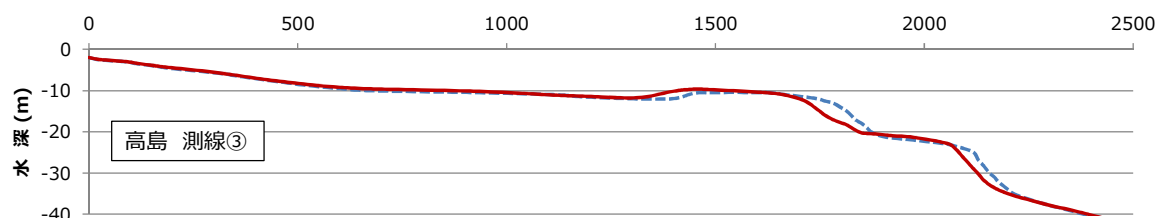


図2 高島漁場の測線③における今回の測深値(実線)と湖沼図から読み取った水深(点線)の比較。横軸は調査船の移動距離(m)を示す。

本報告は滋賀県資源管理協議会からの調査委託事業の成果の一部である。